

極楽通信

UBUD

vol.23

UBUD



photo:Y. Hori

トベンである。私はこれが大好きである。特にこの Topeng Tua (トベン・トゥオ) におけるじいさんはいい。動きは少ないが踊り手の力量が出るらしいので演じるには難しいトベンだと思われる。

もちろん最初からこういった渋めのが好きだったわけではない。やはり最初はレゴンやケチャのように見た目に派手に映る踊りに引かれた。しかしオダランなどでトベンを見るにつけ、このパントマイムに似た渋い表現と動きがたまらなく好きになってしまった。(今でもレゴンはもちろん好きだが)

仮面劇のような芸能は世界にもいろいろあるが、私とその魅力を本当に感じたのはバリのトベンなのである。ペルソナとも呼ばれる仮面に表現される人間の二面性、とかなんとかといった難しいことは忘れて、純粹に楽しめて、笑えて、ちょっと怖いといった感情が素直に見ているものに反映される芸能だと思う。

バリ語がわからないとくやしい思いをする数々の道化の掛け合いに比べて、このトベン・トゥオは言葉とは関係のない世界で観客の心をとらえる、ということがじいさんの力量なのかもしれない。

堀 祐一

Contents

● Kabar Baru Berita Lama オダラン立入禁止	4
● Baris China パリス・チナ	5
● The Twilight Rider S・I・M / 運転免許証	6
● Pin-Pin-Boh/3 インドネシア語講座 / 3	7
● Perawatan Anak [4] 正しい出産と育児 in Bali-4	8
● C・O・L・U・M・N バリ恋愛症候群について - その3 -	11
● Dari Jepang ほんとにほんとに金色の夕日	12
● Bali Buku Catatan Harian/1 バリ日記 [1]	13
● 留学生日記 / 4 授業、初体験!	20

● TOKO BEST 店 RAMAH TAMAH	22
● Warung 味な店 DARI-MANA	22
● Pondok Manis 私の常宿 Kokokan Hotel	23
● Pesan & Kesan 旅人一声	23
● Berita Terbaru その他のニュース	24
● Orang-orang Ubud/23 うぶんな人々 / 23	25
● O-Shi-Ra-Se おしらせ	26
● Pengumuman でんごんぼん	26

○表紙のことば○

"十シキカンアールはヘルシーフード。
これを食べていねば"やせる!"

4年前、最後に BALI に
行ってから 飢餓の末
10KG 太った私が
心のよりどころにしている言葉が
これです。

でも 今度 BALI に行って
みんな私だって
おからないかも……
どーしよう..

小塚 昌子

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

Macintosh format または Windows format の FD (Text Data)

E-Mail :

MHC03202: 菅原 (NiftyServe)

GCB01162: 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

特派員報告 オダラン立入禁止

去る10月中旬から約一ヶ月、UBUDのPr.DESA(プラ・デサ)で大規模なおダランが行なわれました。(実はこれを書いている今、始まったばかりなんですけどね)このオダランのための準備は何ヶ月も前から行なわれていましたが、村人総出でムキース(ご神体などを海岸に清めに行き、お祈りする儀式)に行ったり、毎晩催されているプリ・サレンのパフォーマンスがおダランの期間中すべて中止になったりと、UBUDあげての大オダラン。

さて、ここでちょっと寂しいニュースです。オダランの始まったプラ・デサの入口に、「ビジター立入禁止」の看板がデーンと出てしまったのです。以前は、「こんな服装の人は入れません、ちゃんと正装していればOK」みたいなことを描いたイラスト看板でした。そして、極通スタッフを始めとするUBUD熱愛症候群の日本人たちも、チャナンを持って、Dupa(お線香)を持って、とっておきのクバヤとカマンで正装して、ワクワクしながらMuspa(お祈り)しに、あちこちのプラに行ったものでした。

7年ほど前に行なわれた、チャンブアンにあるプラ・グヌンルバーのおダランでは、あらかじめ観光客に英語で書かれたおダランのスケジュール表が無料で配布されたことがあります。そこには、観光客が入っちゃいけない日と、入っている日がちゃんと丁寧に書かれ、「Welcome Visitors, Please join us and pray together」と書かれていて、これを読んで「極通」スタッフは大感激したものでした。この村の人々は、違う国の違う宗教での観光客に、「どうぞ、私たちと一緒に祈りましょう」と言ってくれたのです。なんと心臓の広さ、暖かさでしょう。村人たちにとって何よりも大切な宗教儀礼の場に、われわれを「Welcome」と招いてくれたのです。

それが、今は「CLOSED」になってしまいました。この看板は10月初旬に行なわれたパダン・テガルのプラ・デサのおダランから登場しました。おそらく、村かバンジャールの会議で決められたのでしょう。これからUBUDで行なわれる、すべてのオダランでこの看板が使われることが予想されます。なぜ、こんなことになってしまったのでしょうか。観光客があまりにも興味本位で足を踏み入れ過ぎてしまったのでしょうか。実際、服装についてや、フラッシュ撮影禁止の注意書きを無視してしとか思えない観光客を何度も見かけました。以前、ある村のおダランでワヤン・クリッを観ていて、フラッシュでパンパン写真を撮っている外国人女性を発見。地元の人々も眉間にシワを寄せていました。そこで堪り兼ねた「極通」スタッフは、つたない英語で「フラッシュはダメって、入口に書いてありますよ」とアドバイスしました。すると彼女は、理解不能な早口の英語で、目を吊り上げ、すごい剣幕で言

い返すのです。ポーゼンとしたままの「極通」スタッフに、そばにいたバリの人は「言ってもしょうがないよ、放っておきなさい」と慰めて(?)くれたのでした。このところ、どんどん観光客が増えて、一大観光地となりつつあるUBUD、きっと村の人たちが「言ってもしょうがない」観光客を「放って」おけなくなっただけに違いありません。某ガイドブックには、バリのことに関してこれでもかという程、たくさんの情報が載っています。なのに《オダランを見学する時の注意》は、とても小さなスペースに簡単に、《最低サルンとスレンダンだけはつけよう》と書かれています。これは「間違え」だと思います。われわれ観光客は、彼らの大切な宗教儀礼を、ずうずうしくもお邪魔して観せてもらおうとしているのです。「最低、彼らと同じ正装をして入るべき」です。傍若無人の観光客たちは、バリ人たちを同じ人間として見ていない。<開発途上国にある、有名な観光地に住む人々>としか考えず、自分たちの方が優れてると意識のどこかで思っているみたいです。だから、バリの宗教、そして宗教活動にたいして敬意を持たず遠慮もせず、ズカズカと入っちゃいけない所に入り、しっちゃいけない事を平気でして、涼しい顔をしているのです。バリの人々にとって、宗教活動は自分たちが平和に毎日を通すために、そして、村の住人、この国の人々、この地球上のすべての生きものたちが平和と調和の中で幸せに生きていくために、欠かすことのできないものなのです。それが観光客のためにけがされたり、邪魔されたりするなら「CLOSED TO VISITER」になってもしょうがないのです。UBUD熱愛症候群のわれわれには、たいへん寂しいことですが、あきらめましょう。そして、もし「Welcome」と言ってくれるプラがあったら、必ず、ちゃんと村人たちのように正装して、礼儀作法をわきまえて、失礼のないように見学しましょう。いろいろと考えさせられてしまった、今回の「観光客立入禁止」でした。





バリの舞踏



バリス・チナ

バリス・チナの名前を初めて耳にしたのは1995年である。

バリスと名の付く踊りにはいろいろある。UBUD 近辺でも時々観られる Baris Gede、ヌサ・ペニダの Baris Jangkang (Vol.18 参照)、その他にもいくつかあると聞くが、筆者が運よく観れたのはこの2つだけであった。これらのバリスは、タリ・ワリと呼ばれ、オダランでの重要な儀礼のひとつとなっていて、あまり目にする機会がない。

そして1996年、友人からの情報でデンパサールのルノン村のプラ・ダラムのオダランで「バリス・チナ」という踊りを観る機会を得た。ほかに、サヌール村の Pr.Merta Sari のオダラン (満月の日) でも踊られているようだ。



ルノン村のプラ・ダラムは、村はずれの田んぼの中に小さな森に囲まれて、ポツンとある。夜は電灯の薄明かりに神秘的に浮かび上がるプラである。オダランはちょうどクニンガンの日であった。

バリス・チナの起源については、未だこれといった定説はない。チナと言うのだから中国と関係があることだけは確かだろう。

ひとつの説としては、いつの頃かわからない昔、中国海軍の船が長い航海の間に破損した船の修理にサヌールの海岸に立ち寄った時、バリの人々が海兵隊を見て、彼らの優雅な動作に憧れて踊りを考えた出したという説。

もうひとつの説は、これもいつの時代なのかかわからない昔、不思議な力を持った Sri Keseri Warmadewa というバリの王様が、海から侵略してこようとする中国船を出し抜いて難破させ、その時の生存者と楽器を手に入れここで踊らせたのが始まりという説、である。

バリス・チナの踊りの衣装は、袖の開いた長袖のシャツに裾の開いた長ズボンでカンフーの服のようにも見える。海兵隊の服と想像できる唯一の特徴は、シャツにセーラー・カラーが付いていること。そんな出で立ちに、カウボーイハットをかぶり、右手にサーベルを

持って踊る姿は、バリ舞踊とは随分かけ離れている。上記したような説があるにしても、どうしてこの踊りがこの村に残ったのか不思議である。

伴奏のガムランは、中国が起源ではないかといわれるゴン・ベリが使われる。ほら貝、太鼓 (日本の太鼓のように胴が脹らんでいる。バリの太鼓・クンダンは胴は太くなくスマートである)、ドラ (こぶつき、こぶなし) という構成であり、ただひたすら連続的に激しく叩くのみでメロディはない。

バリス・チナの踊りとゴン・ベリの楽器は、一時バリの南部の村々に散らばって演じられた。が、その楽器のゆくところ悲惨で不幸な事件がまき起こり、結果として、ルノン村に戻ったようだ。以来、バリス・チナとゴン・ベリは霊力を持っていると信じられ、この村の守護神として祀られ現在に至っている。また、善と悪の調和、小宇宙と大宇宙との調和を保つ力と人々に癒しを与える力を持っているとして、パロンやバリス・グデなどと同様に、聖なる舞踊として扱われオダランで今日も演じられているというわけだ。

<踊りの説明は、次回「オダラン体験」で報告します。お楽しみに。>



黄昏野ライダー

…と あぶない探検隊



S・I・M(Surat Izin Mengemudi)

運転免許証

筆者は、★無事故(そういえばある日の深夜、サカ村のビッグ・ベイビーの前で10数匹の犬の軍団を避けて転倒、10メートルほどスライディングしたことがあった。あの時は、壊れたバイクを引っ張ってUBUDまで犬に吠えられながら一時間かけて帰ったけな。)、★無違反(そういえば、女の子を後に乗せて颯爽とクタに向けて左折したところで、警察官にピーピーと呼び止められ、信号無視と言われたっけ。)、そして、★無免許の三無主義の模範的ドライバーだった。無免許運転生活7年間のベテラン・ドライバーであった筆者は、その間に警察官にキャッチされたのが5回。そのうち罰金というよりは、お目こぼし金を支払ったのが4回。

そのキャッチされた内訳は。

【1】「ちょっとそこまで送って」と友人の女性に誘われて、鼻の下の伸ばしたのがいけなかった。「ひったくり犯、撲殺事件」がUBUDで発生したばかりで、デンパサールの警察官(二人組)が検問に来ていて、彼女のノーヘルを目ざとく見つけストップ。読者に告ぐ!ノーヘルは止められる確立がもっとも高いので超要注意。これでお目こぼし金1万ルピア。別れぎわ、警察官が日本語で「ありがとう」と一言。なんじゃこら、である。

【2】バリ島の北側、テジャクラ村へ愛しの彼女に合に行く途中のキンタマーニの山中で、警察官(二人組)にストップさせられた。ここは逃げも隠れもできない一本道。止めたポリスが一瞬間困った顔をしていたところを見ると、どうも大きなパティック柄のバック(どこのお土産屋でも売っている袋)を持っていたのが目に止まり、インドネシア人と間違えてストップさせられたようだ。読者に告ぐ!インドネシア人と間違われぬように観光客らしい格好をしよう。それってどんな格好かな?自分でもよくわかりません。これでお目こぼし金1万ルピア。別れ際に「ハティ・ハティ」と一言。どうも、ご親切ありがとうございます。

【3】クタで新しく設置された信号機の見方がわからず信号無視。バリでは左折は信号が赤でもGOだと思いついていたが、現場には左折専用の信号機が設置され、筆者は赤の矢印で左折したようだ。信号無視と免許証不携帯(免許証は家に忘れてきた、と大嘘をつく)でかなり厳しくチェックされる。警察署が目と鼻の20メートル先にあるので、この時は、お目こぼし大枚金5万ルピアを払っておとなしく失礼させていただきます。インドネシア人は数百万ルピアの罰金だと警察官は言っていたが本当だろうか?

【4】Vol:18の「ヌサ・ペニダ」で書いたように、おとぼけ戦略(何を聞かれても、答えはUBUD、UBUDを連呼)で罰金もお目こぼし金も無罪放免。ラッキー。

【5】これまでの4回は、オートバイに乗っているのストップ。残り一回は車でのストップ。サヌールのバイパスで、10数人の警察官による一斉検問に遭遇。車から降ろされ、道端のテーブルへ。肩章に星の数の多いなにやら偉そうな警察官が怖い顔をして座っているので、おとなしく2万ルピアを支払う。するといきなり怖い顔がほころび、全員で「ありがとうございます」のご挨拶。そして、「気をつけて」とみんなに手を振られる。何だか「お客さまいっちょ上がり。」「またのお越しをお待ちしております。」なんて言われているようで、思わず「ここはマクドナルドじゃないぞ!!」と、大声が出そうになるのをこらえ、頭を深々とさげ「ご無礼しました〜」

どうして、こんなことを書いたのかというと、今回、筆者は、三無主義を返上してS・I・Mを取得することになったのである。と言って、事故を起こそう、違反をしようというわけではない。S・I・Mを取ったのが得か、それとも、取らずに“お目こぼし金制度”に甘んじているのが得策かという損得勘定を試してみたのである。

お目こぼし金は過去7年間で合計9万ルピア。いっぽうS・I・Mのほうは、われわれ外国人は年間有効で料金は11万ルピア(インドネシアの人は5年間有効のS・I・Mが発行され、料金はわれわれと同じで11万ルピア)である。これは誰がどう考えてみてもお目こぼし金を払ったほうが得である。しかし、筆者は悩みに悩んで、一度インドネシアのS・I・Mも持ってみたいな、なんてミーハーな考えで取得することにしたのであった。

さっそくギヤニャールの警察署に出向き、友人の警察官に“袖のした制度”を利用させていただいて、事務手続きをスムーズに済ませた。署には最新のコンピューターが設置され、数分で写真入りのカードタイプのS・I・Mがいっちょう出来上がり。

「これで、オドオド、ドキドキなくて、堂々と運転できるゾ〜!!」

だが、喜び勇んで手にしたS・I・Mは、なんと筆者の性別がWANITA(女性)になっている。天国のお父さん、お母さん、ごめんなさい。あー、いつのまにか姓転換してしまいました。神の悪戯か、身長も180センチあったのが165センチと書いてある。刺青やピアスは愛敬でしてみたが、ついに女性になってしまった。あー、どうしよう。係官は、「ティダ・アパ・アパ」と優しく慰めてくれる。慰めてはくれるものの、決してS・I・Mを作り直してはくれないのである。

「まあいいわ、BALIだからティダ・アパ・アパよね。」(あつ、いつのまにかオネー言葉になっている)

読者に告ぐ!ちゃんとS・I・Mを取るのもいいもんです。以上、「黄昏野ライダーS・I・Mを取る」の報告でした〜。



3

■飛んで、飛んで、飛んで・・・

9月のインドネシアの空は災難つづきだった。

スマトラ、カリマンタンの森林火災／kebakaran hutanによる煙害／bencana asap、26日にはジャカルタからメダンに向かっていたガルーダ航空機が墜落、乗員・乗客あわせて234名が帰らぬ人となった。不慮の災難に遭われた日本人6名を含むすべての犠牲者のご冥福を祈る。

この航空機事故／kecelakahan udaraの起きる3日前、メダンからジャカルタに到着したガルーダ機では思わぬ珍事が発覚し、関係者を驚かせた。ここでもまた、ABG=Anak Baru Gde(前号参照)が周囲の予想の及びもつかないハチャメチャをやっちゃってくれたのだ。今回登場するABG代表は北スマトラに住む高校生、Manto(16歳)とSiswandi(17歳)の両君。このふたり、大胆にも飛行機のタダ乗り／terbang gratisをやらかしてしまった。しかも、前輪格納室／ruang roda depanに潜りこんでの2時間飛行!ジャカルタに到着して発見されたときには、ふたりとも息もたえだえの状態だった。そのへんの事情を新聞はこう伝えている。

“Mereka ditemukan dalam keadaan lemas setelah terbang gratis selama dua jam” 上空の寒さによく耐えられたと思うのだが、回復後、記者の質問に答えてManto君はこう言っている。

“Saya sempat menggigil, kedinginan dan sesak napas /ガタガタ震えていました、寒さと息苦しさで” この記事を読みながら、びんびん坊はなぜかあの“風せんおじさん”に思いをはせていた。どうしてだろう、いまごろ。茶目っ気もあそこまでいくとただのお騒がせでしかないけれど、それにしても人はなぜかくも大空にはばたくことに憧れるのだろうか・・・なんちゃって(そういえば、ナンチャッテおじさんっていうの聞いたなあ)。

エキセントリック／luar biasaなおじさんたちに比

べていささかも見劣りしないわれらがABGの行動だが、それはそれ悩み多き思春期だもの、粋狂で人騒がせに及んだわけでもないだろう、と理由を探るとー

“Saya ingin kabur dari rumah, karena banyak persoalan, termasuk urusan belajar /家出したかったです、勉強のことも含めて問題がたくさんあったので” うーん、飛行機に潜り込んでの家出ねえ、まあそこがABGたるゆえんかも。

■2度あることは3度？

メダンからジャカルタまでの2時間を無事に(?)飛んだ高校生二人組にあやかろうと、ナントこんどはNinaと名のる40歳のおばさんまでが、terbang gratisに挑戦しようとした事件が25日、Bandara Ngurah Raiで発生、またまた世間の耳目をあつめた。機体整備係／petugas teknik pesawatに発見されたとき、このNinaおばさんときたら長ズボンにブラウス、カバンふたつを下げた旅行支度でちゃっかり主輪のそばに座っていたという。整備係の詰問にNinaおばさん、“Memang merencanakan masuk ke ruang roda, agar dapat terbang ke Yogyakarta /もちろん、車輪のところに入り込む計画だったわよ、ヨグヤカルタまで飛んでいけるようにさあ” と言ってのけたそう。でも、狙われたこのガルーダ機、目的地はジャカルタだから、Ninaおばさんちょっと計画がずさんだったようだ。

それにしても、こうもつぎつぎと飛行機にしがみついて無賃乗車(?) / penumpang gelapしようとする人々が登場するとしたら、この先どういうことになるんだろう。

じつは、冒頭の墜落事故では、乗員・乗客名簿によると234人の犠牲者となるのだが、その後の遺体取捨の結果236人の遺体が確認されたという。とすると、名簿外のふたりというのはいったい誰???



正しい出産と育児



by ムーン・ストーンの花嫁

NOMOR 4

■第4弾「恐怖のオペラシ・パートI」

イカン・パンガンを食べ終えた私とDは、その足で病院に向かった。あとになって考えたら、バトゥランのベモ・ターミナルまで来たのなら、家はすぐそなのだから、入院のための準備をするために立ち寄ればよかったのだ。下着から赤ちゃん用品、私の洗顔クリームや化粧水など、この時に持ってくるべきだったのだ。ましてや、入院の前にぜひ揃えておきたかったナプキンとかも、買ってない。しかし、ドクトル・Sの、赤ちゃんについての状況説明やら、手術のことやらで不安のあまり思考力が半分マヒしてしまった私とDは、とりあえず、DY病院に直行してしまったのである。

「救急病院」と名が付いているDY病院は、正面受付ロビーからして閑散としていた。受付カウンターでは、ひとりの看護婦がひじをついてボーッとしている。そのうち、近づいてきた腹の大きい日本人に気づき、興味深々といった顔つきで、「バゲマナ〜？（どうしましたか？）」と尋ねた。「ドクトル・Sから紹介状をもらってきたのですが」と言って差出すと、授業に飽きた学生が机の上でヒジをついてダラダラしているような格好のままで、「オラン・ジャパン、ヤ？ スダ・ラマ・ディ・バリ？」と私に話しかけるのである。そんなことより「今日、ここに入院するはずになっているのですが」と念を押す。「ヤァヤァ、バグース。ディ・マナ・ティンガル？」いやいやそんなことはいいから、「常勤の産婦人科の先生は今いるのですか？」私の眉間はすでにシワが寄り始めている。看護婦は不二屋のペコちゃんのような目で上の方を睨んで「う〜ん？ スプンタル、ヤ！」と、やっと内線電話をかけ始めた。ここで、車を降りてからタバコを買いに行っていたDが戻ってきた。看護婦は改めてバリ語でDと話し始めたが、どうも常勤のドクトルもいないし、取り合えず入院手続きでも始



Illustr: Yume-Hime

めましょう、ということになったようだ。部屋を見せてもらい、冷蔵庫とテレビとマンディールームの付いた、ちょっと高い個室を選ぶ。このDY病院の他に、バリで一番大きいと言われているS病院の支払い窓口には、診療費、入院費などあらゆる費用が明記されているパネルが貼ってある。そこには、W・N・Iという欄とW・N・Aという欄と、別々に2種類の費用が書かれている。W・N・Aの欄には、W・N・Iのそれぞれ5倍から10倍の値段がついている。実はW・N・Iは、インドネシア国籍、W・N・Aは、外国人の略であり、外国人患者は、インドネシア人患者より堂々と数倍高い治療費を払わされる仕組みになっているのだ。それを思い出した私は、入院手続きを始めた看護婦に、私はバリ人と結婚して、この人の家に入って生活しているので、諸々の費用はバリ人と同じ価格にしてもらわなければ困る、と告げた。看護婦は、面倒臭そうに「ヤァ、ヤァ」と、答えるだけである。

常勤ドクトルが来るまで部屋でテレビでも見て、と考えていたら、いきなり診療室までつれていかれ、診療ベッドに寝かされる。Dは、私の服や赤ちゃんの服、おむつなどを取りに家に帰ってしまった。それにしても病院内は、どこもかしこもシーンと静まりかえっている。他の患者もあまりいない。私のお腹はどうなるんだろう、オペラシ（手術）なんてイヤだ。確かに小綺麗で新しい病院のようだが、この人気のなさはなんだろう、看護婦もなんだかダラダラして全然看護婦ら

しくないぞ…。考えれば考えるほど不安になる。診療台の上で待たされること約30分。やっと先生らしき人が現われるが、それにしても若い。インターンみたいだ。「ドクトル・Sは夜ここに来るそうですよ。常勤ドクトルももうすぐ来ます。陣痛薬を使うかオペラシになるかはまだわかりません。ところで、ダリ・ジャパン、ヤ？ スダ・ラマ・ディ・バリ？」ううう、私は土産物屋にいるのではない、診療台の上に乗ってまでそんな会話をぞしたくない。ベモに隣り合わせたおばちゃん、スーパーのレジのお姉ちゃん、美容院のシャンプー師、ナシ・ブンス屋のおやじ、ガソリン・スタンドのお兄さん、私の行くところ行くところ、必ず聞かれる「スダ・ラマ・ディ・バリ？」。果ては、友人に頼まれてリコンファームの電話をすれば、ガルダの社員までが、このセリフを私に言うのである。「もう、バリに長い？」と、聞かれ、「いいえ、まだ7年です」と答えれば「え～っ？ 7年も！」のリアクションのあとに必ずまた質問が続く。「はい、少し長いです」と答えれば、「長いつてどのくらい？」と、必ず聞かれる。そのあとの質問ももうパターンが決まっていて、私は正直言ってボサン・スカリ（たいへん飽きた）なのである。その上私は、お腹の中のBabyのことで不安でいっぱいなのに、もう勘弁して、なのである。インターンのお兄さんには申し訳ないが、思い切り不機嫌な顔をしてダマリ込んでいたら、身体の調子が悪いと思われたらしい。インターンは、ちょっと慌てたように部屋を出ていき、廊下で大きな声で看護婦と話しをしながら、なにやらバタバタと走って行ってしまった。2～3分すると、中年の、ちょっと頭がハゲかかったオヤジが入ってきて、「ドクトル・Sと電話で話しました。どれどれ」と聴診器をお腹に当てた。どうやらこの人が、例の常勤ドクトルらしい。私のした不機嫌な顔つきが無駄にならなかったのか、急いで来てくれたみたいだ。彼は難しい顔でしばらくお腹の赤ちゃんの心音を聞いていたが、「ティダ・アバ・アバ。もう少し待ちなさい」と言ったまま、また部屋から出て行ってしまった。

今度は入院部屋の方に移り、さらに待たされること30分。検査するなら早くしてくれよう。だんだんイライラしてくる。ここでなんだか、お腹が急に張ってきて痛いような、重いような感じになってきたのに気付く。今まで感じたことのない張りである。

Dを始め、叔父など数人の家族が到着した。常勤ドクトルが再び部屋にやってきて、今度は超音波ドップラー法（Vol:18 参照）で、私たちにもBabyの心音が聞こえるようにしてくれた。「ほら、みなさん聞いてください。赤ちゃんの心音です。時々不規則になったり、弱くなったりするでしょう？ わかりますか？」Dは青ざめている。「この状態ですと、普通分娩した場合、赤ちゃんが危険な状況にならないとも限りません。ド

クトル・Sとも話しましたが、これはオペラシして取り出した方がいいと思われませんが、どうしますか？」叔父は、今ひとつ理解できない、といったような顔で「どうしますか？と言われても困る。オペラシはどうしてもするべきなのですか？」と、ドクトルに尋ねる。「いや、どうしてもというわけではありません。このまま陣痛を待って普通分娩することもできます。しかし、オペラシをした方が安全である確立は大きいのです。さっきの赤ちゃんの心音を聞いたでしょう？ もし普通分娩で赤ちゃんに何かあったらどうしますか？」「どうしますか？」なんて言われても、どうしようもないではないか。そこまでそんなふうに言われれば、普通の人だったら「だったらオペラシしてください」と言うに決まっている。要するにドクトルは、「オペラシの方がいいようだが、費用が高いのでどうしますか。払えるようだったらオペラシしましょう」みたいなことを言いたいのである。ビゲン（どうしたらよいかわからない状態）のDは、日頃から硬派でめったに優しさを私に対して表さないのだが、今はなんと、私の手を両手で握りしめて悲痛な顔をしてだまりこくってしまっている。私は「先生、なんだか私、お腹が重いようなヘンな感じになってきました。これはもしかしたら陣痛の始まりなのかもしれませんが、赤ちゃんがそういう状態なら、ぜひオペラシをしてください」と、キッパリ言った。何を聞いても、私の息子は無事に産まれてほしい。私のお腹の中で新しい生命を受け息づいてきた、私の赤ちゃんはバリ人である。バリに憧れて憧れて、でも日本人の血を持っている私は、バリ人になれなくて、バリ人と結婚したものの、まだなんだか宙ぶらりんの状態の私が、バリ人の血を受け継いだ子供を産めるのである。この子は絶対、無事に産まれねばならない。目頭をじーんと熱くさせて、ひとり感動にひたっている私に、ドクトルは言った。「さて、内診してみますか？」げ～っ、あの恐れていた内診である。オペラシすることに決まったのに内診するのう…？ その時の状況や感想をここに書くのはよそう。ポルノ小説ではないのだ。

結局、子宮口が1センチほどすでに開いている状態で、このまま待てば今夜か明朝にでも陣痛は来るはず、とドクトルは説明し、「でも、オペラシと決まれば早い方がいいでしょう。ドクトル・Sが執刀するように手配しました。彼は今、他の人のお産でK病院にいますが、そのうち来るでしょう。あとで看護婦が来てオペラシの準備をします。このまま待っていなさい」と言って部屋を出て行った。

まず始めに来たのは年配の看護婦である。「パンツを脱いで。剃りますから。」と、淡々と言うその手には、ジレットの小さな薄～いカミソリの刃だけが握られている。これも状況は説明したくない。ただただ、恥ずかしいだけである。両手で顔を覆いたかったが、そん



Illustration: Yume-Hime

なことをすればよけいにカッコ悪い。年配の看護婦は、もくもくと作業を続けている。「スタ・ラマ・ディ・バリ？」と聞かれないのが本当に救いである。

…と突然、ものすごく面倒そうな顔をして「コ・トゥバル・スカリ…。オラン・ジャパン・トゥバル・ヤ!？」と言う。要するに、日本人はみな濃いだの、どうのと言うのである。私は「ヤ、ヤァ…」と、いい加減な返事しておいたが、もう、穴があつたら入りたい。だんだん泣きたくなってきた。恥ずかしさが最高潮に達したあたりで作業は終わった。続いて彼女が取り出したのは産葉であった。普通分娩でも、オペラシでも、インドネシアでも、日本でも、みな同じなのだ。私だけではない。みんなみんな妊婦は剃毛とカンチョウをされるのである。「えっ?でも私さっきイカン・パンガン食べたばかりなだけけど…」「ティダ・アパ・アパ。できるだけ我慢してからトイレに行つてね」私だけではない、と自分に言い聞かせる。トホホ。次に現われたのは、随分若い看護婦が二人。「尿を取る管を入れます。少し痛いけど我慢してください」そんなものをそんなところに入れられたことは一度もない。しかも、若い彼女らは、まだ経験が浅いのか、バリ語でヒソヒソ、あ～でもない、こ～でもないといいながら、何度も試みるのである。そのたびに、飛び上がるほど痛い。少しどころではない。大声をあげそうになるくらい痛い。剃毛といい、カンチョウといい、尿管といい、これはもう拷問である。だからといって逃げ出すわけにもいかぬ。妊婦はみな、エライ。白い木綿の手術用の服を着る。頭にかぶるヘア・キャップのようなものが、私の髪が多くて長いために旨くかぶれない。若い看護婦は、「ア～・ティダ・アパ」と言って、ヘア・キャップからはみ出している私の髪をムリヤリ首の下に押し込んで、準備は終わった。

移動ベッドに横になったまま、手術室に運ばれる。恐い。生まれてこの方、オペというものをしたことがない。手術室は、普通の部屋に手術台と手術用のランプをドーンと置いたような、にわか手術室とでも呼びたくなるようなものであった。4～5名のスタッフが、大きなマスクに白衣でのんびり行き来して準備をして

いる。まず、左腕に血圧を計るためにクッションのような布を巻く。デジタル表示の日本のTVなどでよく見る、あんな機器なぞどこにもない。血圧係と思われる兄ちゃんが、私の左側に座り込んで、手動式血圧計を動かしている。フカフカフカフカ…シュー。空気を入れている音と、抜いている音である。フカフカフカフカ…シュー。そんなに何度も計る必要などないのでは?…フカフカフカフカ…シュー。やっぱりそうだ。目は血圧計を見ていず、丸出しになってアルコール消毒されている私の白いお腹を見ているのである。私の批判的な視線に気付いた血圧係は、エヘヘ、と笑って私に言った。「ブ、スタ・ラマ・ディ・バリ?」う、う、う、うるさい!!私は、その質問を無視して「ドクトル・Sは来たのですか?!」と尋ねると、血圧係は「へっ?ドクトル・S?おい、ドクトル・S来たか?」とバリ語で、他のスタッフに聞いている。私の問いに対する答は、あやふやのまま横向きにされ、脊椎麻酔(下半身だけマヒする麻酔)が射たれる。下半身が見えないように、小さなついたてのようなカーテンのようなものが私の胸の上に置かれる。

下半身は完全に麻酔が効いたようだ。「モモを思い切りつねったんだけど、感じないね?」おいおい、だからといって余計なことしないでよね。それにしても、麻酔を射ったのに肝心の先生は…?!時間はちょうど夜10時半である。スタッフらはサンタイ(のんびり)である。バリ語で大声でなにやらおしゃべりして笑っている。私ひとりであせってもしょうがない。やけに時間が立つのが遅く感じる。

10:45。スタッフがそろそろ「おい、それにしても遅いな。えっ?!さっきまでK病院でお産があつたって?!K病院が一番高いトコだからな、こっちは後回しってわけか」みたいなことをバリ語で話し始める。え～っ?!じゃあ、K病院のお産が終わるまで、私はこのまま待て、というの?!麻酔を射って、もう15分もたっているのに…。

この後の恐怖の手術は、次回書くことにして…。つづく!!

バリ恋愛症候群について

- その3 -

長期滞在者 M 嬢

N は、いわゆるフリーのドライバー。借金して自分で車を買って、この仕事を始めた、と言う。毎月銀行に借金を返しているらしい。今年を始め、「サヌールに引越すから」と挨拶にやってきました。自分で車を持っている、と言っても、この商売、毎日仕事があるという保証はない。「サヌールで旅行会社に入って日本語のガイドになりたい」と、彼が言った時、私も即座に賛成した。N は実際日本語が上手だ。「でも、アテはあるの?」とお節介ながら聞いた私に、その時彼はちょっと口ごもったが、こう言った。「恋人が、サヌールの旅行会社で働いているんだ。」「…日本人?」「そう。」「で、彼女があなたを、その旅行会社に入れてくれるの?」「入れるかどうかはわからないんだ。でも彼女が、試験を受けられるようにしてくれた。」しかし…だ。確か彼は、日本に恋人がいた筈。以前「結婚を彼女の両親に反対されていて、もうずっと彼女から連絡がない」と言っていたのを、私は聞いている。「それは、サヌールの彼女も知っているよ。」「じゃ、前の彼女とは別れたの?」「ううん、別れてはいない。時々手紙が来るし僕も電話をする。」「そういうの、二股、って言うんだよ」「フタマタ?」「パチャールを二人持つてる、ってこと。あんまり良い言葉じゃないけど。」私の言葉に彼はこう言ったのだ。」「だって、サヌールの彼女は知ってるよ。正直に話したんだ。ねえ、もし僕が結婚していて、それを彼女が知らないとしたら、それは悪いことだよ。でも僕は結婚してない。それにサヌールの彼女は、僕に他の恋人がいることを知っていて、それでも僕と一緒に住みたい、って言うんだ。」

日本人とバリ人の恋愛の場合、多くの場合私は敏感にく利害関係の匂いを嗅ぎとってしまう。意地悪な考え方かもしれないが、Nにとって“日本人”は自分の生活をランクアップさせるための一つ的手段ではないか、と思えなくもない。と言ってもNは上昇志向が強くて女を踏み台にするような、みるからにそういう嫌なやつではない。サヌールに行くのだから「ウブドにいてもクルンクン出身でここに親戚がいない自分には仕事がない。フリーのドライバーくらいしか仕事がないんだ。バリの社会はファミリーシステムだからね。日本は実力があればどんな仕事にもつかるだろう?それは羨ましい。だから自分はチャンスがあればつかみたいんだ。」と言っていた。バリで働くのに縁故関係を頼ることの出来ない人間が頼る事の出来る“別の形の縁故関係”、という図式の中に、最近は“外国人”という項目が入っているような気がする。しかし、人間関係を長続きさせるのはどうしたって努力がいる。本当に手に入れたいと思ったら、キッカケよりも、大事なものは“それから”だ。Nはガイドの仕事を得るためには、まだまだ努力しなければならないだろう。日本人相手に働くのであれば“日本人の性質”だって学ばなければならない。彼女は許してくれたって、お客さんは許してくれないことだってある筈だ。同じ様に、彼女も努力しなければならない。彼のように“上昇志向”の強いバリ人を恋人に選んだ場合、彼にとっての“自分の価値”を常にキープしておく努力が…。これは実際ハードなことだなあ、と私は思う。始まりはともかく“純粋にこの人が好き”というだけでは語れない、付随してくる種々の現実。バリだって例外ではない。いやバリだからこそ、の問題さえ加わる筈だ。恋愛感情と利害関係と周辺事情。これは多分例外なくいつかは、すべてのカップルが直面させられる事柄なのではないだろうか。

ガイドの仕事を得たあとで、Nが“つかみたい”と思う次のチャンスが何なのだろうか、それは今はまだ誰にもわからないことだけれど…。

DARI JEPANG

ほんとにほんとに金色の夕日

TAKA-chang

日本の春の終り、シンガポール・エアのチケットを握りしめ、私はBALIにやって来ました。これから始まるUBUDの生活にドキドキしながら、シャトル・バスに乗り込み、熱い太陽と青い空の下広がる、明るくて元気な景色を眺めながら、ふと考えました。

「帰りの車の中、私はどんな気持ちでこの景色を見るのかな。」

・・・・・・それから2か月後、BALIを去る日のこと。

その日は天気が悪く、朝から雨が降ったり止んだりしていました。いざ、空港へ向かう車に乗り込んだ時、雨はピークを向かえ、見事なまでのざあざあ降り。まるで、「帰りたくないよォ！」と叫んでいる私の心の様。車は空港へとひた走り、窓の外の景色はぐしょ濡れで空はどんよりと灰色。しょんぼりしている私の心はより一層沈んでゆきます。数えきれない思い出を回想する余裕もなく、ただただ、BALIを去る切なさ、日本での不安が私の心を支配していました。その時、「TAKA？ TAKA！！」見送りに来てくれている男の子の声。顔を上げると、いつの間にか雨は止んでいて、車はデンパサール付近を走っていました。そして、彼の指さす方へ目をやると・・・・・・白い空に金色の夕日。ほんとにほんとに金色の夕日とその金ピカをまき散らしていました。「うわぁ！ 光が雫になって降りそそいでる！！」金色の光は空から、キラキラと音をたてて降りそそぎ、島を、街を、車を包んでいました。その雫は私の上にも届き、ゆっくりと身体中に染み込んでゆくかの様。(注：薬はやってませんよ！)そして、それが心までゆき渡る頃には、切なさも不安な想いも消え去っていました。この夕日のかけらを胸に、頑張ろう、そしてまたここに来よう、と。私は、最後の最後にすごい景色を見せて、私に力を与えてくれたBALIと、それを教えてくれた彼に感謝しながら、夏真盛りの日本へと帰って行ったのでした。

BALIを離れ、2か月がたった今、流れる雲や街の匂いに、ふとBALIを感じる事があります。そのたびに、BALIでの暮らしとUBUDの皆さんの事を思い出して、「今すぐ飛んで行きたいのに～！」と、じたばたしたりして。やっぱり、日本の“今”とUBUDの“今”は遠くて、切なくなったりもするけど、最後の日にBALIがくれたおみやげを胸に、もう少し頑張ってみようかなって思っています。

- 今日 BALIの空に夕日はありますか？

願わくば、「ほんとにほんとに金色の夕日」が、皆さんの上に輝いていますように！！



Illust:Fumio

バリ日記

ウブド大好き！ 渡辺一郎 & 小堀桂子

1回目：1995年4月29日～5月5日

●はじめに●

ワタシたちは、結婚10年目の円熟味？を帯びつつある夫婦です。みなさんと同じくバリが、そしてウブドが大好きで、1995年以降、毎年バリに出かけています。

1995年以來はバリ旅行の度毎に、「バリ日記」なる作文集をデッチあげて、友人、知人、そして大胆にも「影武者」の伊藤さんにまで送りつけて来ました。伊藤さんはワタシたちの恥ずかしい作文集を、あろうことか「APA？」に置いて下さいましたが、嬉しい反面、そのあまりの赤面モノに恐れおののく毎日です。

そしてなんと今回は「極楽通信」の原稿依頼！あの個人的に勝手に尊敬している南部ヒロッシュ氏の「ピンタン涅槃楽」の後に、ド素人の雑文が掲載とな！あなおそろしや！ま、そこはド素人の怖いもの知らず、出たがりの性格もあってお受けしましたが、私達の「バリ日記」はウチワものなので、掲載に当たっては大幅に加筆訂正しました。

また、私達は旅行の時に、1日毎に「当番」を決めます。「当番」はレストランの選定から家計簿つけ、日記つけ等、ありとあらゆるメンドクサイことをその日1日、押しつけられることになります。

「バリ日記」は文字通りその当番がつけた日記がもとになっていますので、基本的には小堀か渡辺のどちらか一人がその日の日記を書いて、もう一人がそれにチャチャを入れる、という形になります。バリでつけた日記がもとなので、勘違いや聞き間違いやオモイコミ等が多々あるかと思いますが、その辺は笑ってユルして下さいね。

「極楽通信」の読者のみなさんには、長期滞在してるうちにウブド人と化した方なども多いことでしょう。そんな皆さんにはワタシたちのちっぽけな旅行など笑われてしまいそうですが、会社の短い休みを何とかやりくりをして、味気のない毎日にちょっとウブドの風を吹き込んで潤いを得て帰っていく、というも平均的なニホンジンの姿だと思います。その平均的なニホンジン達には「ウン、ウン」と、そしてベテランたちには「ああ、初めての時はこんなやったなあ」とホロ苦く思い出してもらえたら嬉しいなと思います。恥ずかしいけど、しばらくの間、ヨロシクおつき合ください。



■ 1995年4月29日

朝5時、2人ともお目覚め。コーンしているのか、目覚まし時計より早く起きてしまう。タクシーで京都駅。京都駅からJRの特急『はるか』で関空へ。

GW初日のせいか『はるか』は満席。指定券を持っていないおさんが立たされておちぶち言っている(はるか、には、立ち席ってのがあるのだね)。ねーちゃんたちがぎゃーぎゃー言っている。私たちはにこにこ旅行の喜びを語り合っている。

はじめての関西新空港、着。バカでかい。が、ショッピングセンターや免税品店はイマイチ。不況のため出店が少なかったのか？

さて、搭乗。コンチネンタル・ミクロネシア航空、ダグラス DC-10 型機だ。着席。あ〜むしようにビールが飲みてえ。ステーキが食いてえ。女を抱き…失礼。

パドワイザーのライトをもらい、ステーキを食う。機内食なんていつも余りおいしいとは思えないのだが、ガルルル!!空腹のためおいしく感じてしまった私。何事も感謝する心が大切なね。

グアム着。トランジットだけなので税関・検疫コースではなく、コンチネンタルのブースへ。

やっとバリ島着。しつこいポーターがウジャウジャ。No,thank you. が全く通用しない。Jibundeyarukara!! でやっと解放。税関ではなぜか Open を要求される渡辺。三脚の雲台の箱に興味を示す係員のオヤジ。雲台なんて専門用語の英語わからないよう。「!!!」必死に説明する渡辺「あつ、そつ。」てなカンジであっさり 無罪放免するオヤジ。ええい、その程度だったらいちいち Open させんなよな!

送迎のガイドはドウアジャさん。お疲れのご様子で全くやる気がない。どこの国のガイドでも必ずかけてくる技、しつような両替攻撃も「もう済みました」の一言であっさり とひささがるテイトラくだ。

ホテル着。ご指名で予約したサヌールのガゼボコテージである。すげえホテル。こんなすげえホテルでも何と2人1泊55\$だぜ!日本のHホテルの休憩料金よりも安い!ここには、アジアのリゾートホテルにありがちなトンチンカンさがない。バリの人達は、外人がバリの何を喜ぶのかを知りつくしているのだ。照明は蛍光灯一切なし。ちいさな白熱灯にはかならずしゃれたカバー。暗過ぎるほどにアジアの闇の静粛を演出。ドアやイスやテーブルには凝った彫刻が施され、クッション類にはすべてイカットが用いられている。合理性を絶対視する一方で、表面的なイミテーションに慣らされている我々にはすげえ豪華に感じられる。もちろんここよりも豪華な高級ホテルは他にもたくさんあるだろう。でも遠い昔からリゾートでありつづけてきたバリは、リゾートとして大人。我々が泊まる一泊2人4,400円レベルのホテルでさえ(この時はナント\$1=80円だった

のだ)、リゾートとして成熟しているのだ。気に入りました。

とりあえず荷物を置いて、水とビールのお買い物。ホテルのバーで今日の日記を書く。ハラベコだが「クイモンはない」とのこと。『地球の歩き方』には、ここのバーは遅くまでお食事が楽しめる、なんて書いてあったぞ!ステージでは大学ロック研究会風バンドが演奏中。ギターはかなりウマイ。サンタナのフレーズに酔う。(一郎)

■ 1995年4月30日

目が覚めたら5:30。バリ島の東側のビーチであるサヌールは日の出の名所。日の出は6:10頃ということなので、起きて見に行くが、曇り空で、美しい日の出は見れなかった。でも海岸をジャランジャラン。北に向かって歩く。ホテルの前はプライベートビーチになっているが、少し北に行くローカルビーチ。6:30だというのに、子供を連れた両親、カヌーでたわむれる子供たち、赤ちゃんを首まで砂にうずめている父親(でも赤ちゃんは泣いていないのだ…)など、いろんなバリニーズの姿をかいま見ることができた。

気がつけばビーチ・マーケットまで来ていた。このレストランは村営で、収益を村の福祉に役立てるというものだったが、地元の人用レストランのため衛生状態がイマイチ心配なので、今回は大事を取ってこういうところはパスすることにしたのだ。

ポケットにあった地図を見ると、シンドゥ市場がすぐ近くにありそうなので、人波にのって行ってみる。並べられたフルーツ、野菜、スパイス、鍋に洋服……ゴチャゴチャと物が並び、その物も売っているオバちゃんもガラガラしていて、ここもアジアの市場特有の空気が流れている。でも写真を撮りたくても、場内は暗く、フラッシュをたくにも気が引けて、あんまり写真が撮れない。ビーチをジャランジャランだけのつもりで財布を持たずに出てきたので、ただ見ているだけの市場はいつもに比べ何となくおもしろくない。

ふと猫が足下を駆け抜け、一軒の屋台の後ろにかけ込んだ。背伸びして奥を伺っていると、店の人が奥に行ってもいいヨとジェスチャー。そこには2匹の子猫が。そして猫を見ている私たちと、猫を見ているニホンジンを見ているバリニーズ。しばらく見て、「ありがとー」と言って店を出る。今までよそよそしく感じた市場が、いっぺんに身近になったような感じがする。うれしい。

帰りは地図にない道を選んでジャランジャランしながら帰る。車がビュンビュン走るメインストリートからちょっとしか離れていないところに、バリの人達が毎日の営みを行う場所がある。家があって、畑があって、市場があって、学校がある、というのがいい。ヌサドゥ

アは証明書がないとバリ人はその地域に入ることすらできないという異常な空間。そんな隔離された空間より観光客も地元の人も共存している、というのが好きさ。

朝食はホテルのレストランで『フル・ブレックファースト』。フルーツジュース、フルーツの盛り合わせ、卵料理、パン、コーヒー or 紅茶、で7,000Rp(1ルピア = 0.04円 / 7,000Rp = 280円)。レストランはビーチに面していて、一番ビーチに近い席に座り、潮風に吹かれキラキラ光る海を見ながらの豊かな朝食は、至福。

その後、サヌール唯一の観光場所、ル・メイヨール美術館に行く。公共の乗り物であるベモに初めて乗る。空のベモは無視し、人が既に乗っているベモを探し手を上げる。「ル・メイヨール ミュージアム」と言い、地図を見せ指さしても、「??」。とりあえず走り出す。えー、ちょっとーだいじょうぶなんー、と思っていると、店先で車を止め、聞いてみて、やっとわかった感じ。ホッ。なのに途中で乗っている人すべてが下りてしまい(降ろされてしまい?)、貸し切りの状態に。相場では2人で500Rpなのだがそれでは気の毒なので1000Rpを渡すと、ニコッ。うん、よかった、よかった。

ル・メイヨール美術館は、一郎はガイドブックに載っていたメイヨールの妻(バリダンスの名人、ポロックさん)がおっぱいを出して踊っている写真を見たくて、桂子はメイヨール夫妻が1940年代に住んでいた典型的なバリ様式の家(夫妻の家がそのまま美術館になっている)が見たくてこの美術館を訪れた。2人とも絵にはあんまり興味がないのが申し訳ない。

美術館を入ったところからガイドのような人がついて説明してくれる。一郎は絵よりもポロックさんの写真ばかり撮影しているし、桂子は桂子で「このドアはどうしてこんなに狭いの?」と絵画に関係のない質問ばかりするので、ガイドとしては「なに、この日本人??」という感じだったかも。

次にガラエルデワダというスーパーへ。ガイドブックによると高級スーパーとあるが、いろいろとおもしろいモノが売っている。最も Nice だったのはスパイスのセット。ベビースターラーメンのようにつり下げて売っていて、8種類のスパイス(シナモン・ナツメグ・キャラウェイ・クローブ・ホワイトペッパー・ブラックペッパー・コリアンダー・バニラ)が少しずつついている。絵はがき、ビール、ジュース、ミネラルウォーター、そしておきまりの調味料を買う。

ちょっと座るつもり…、が、隣のケンタッキーで、昼食にしてしまう。ベモで帰る。行きは1000Rpで来たので帰りはなんとでも2000Rpくらいまでにした。でもベモのオヤジ、20,000Rpとな!怒りに震えて重い荷物を持って歩き出してしまふ一郎(あれはポーズだったのよ)。結局2000RpでOK。ホンマにモー!

それなら最初から気持ちよく乗せてよ。バリでは10倍フックられる、というのは本当であった。

帰ってから、ホテルの部屋をフォトセッションしている一郎を残して、桂子が一人でホテルの向かいにある両替屋に行く。ポ~~~~~つとして、20,000Rpほどチョロまかされた(と思う)。今後は両替は二人で行って、必ず確認をしようと誓い合う。

気を取り直してビーチへ。寝椅子にタオルをひいてビールに本。一郎いわく「やっとなの島でウダ〜ッとすごす、ということが実現できたなあ。サムイでもプーケットでもロタでも結局は実現できなかったこの感覚」。うん。このホテルは部屋といい、ビーチといい、レストランといい、とてもいい。わたしたちが思い描く「南の島」がぜんぶある。文句なし。

予約したボナレストランでディナーとレゴンタンス。料理はインドネシアセット\$11、チャイナセット\$18でそれぞれたのむ。どれもとてもおいしい。(桂子)会場は団体さん対応可能でせ風、小学校の体育館規模。そこへのりこむ客は圧倒的に日本人が多い。ま、いーか。お互い様だろうし。

渡辺は性懲りもなく三脚、200mm レンズなどで重装装。ストロボピッカリの写真ではつまらない。ブレによる躍動感を表現せんとカメラオタクキブりを遺憾なく発揮。カシャ!カシャ!ダンスは戦士出陣の緊張感を表現したバリダンスが好きになったぜ。(一郎)

■ 1995年5月1日

今日も5時起床。せっかくなので朝日を見に海岸へ。

一郎は、昨日の朝に売り子もっていたバロンの木彫りを気にしている。木はエボニーの一級品。仕上げは細部までキレイ。彫刻師自ら販売するという産地直送、中間搾取一切は無也というすばらしさ。昨日は\$50といわれ、サイフがない、と断ったが、今日は事前に作戦会議。\$15を主張する桂子。しかしスーパーではベニヤのもっと雑なのが\$15くらいだったのでうちちょっと、ということになり結局\$25でまとまる。(桂子)

いざ、ビーチへ。さっそく、交渉。\$50がラストブライスと言ひ破るのでワザとそれしか持ってこなかった\$25を出す。「\$is OK. Tomorrow More10,000Rp?」だとお〜!ほしがっている当事者ではないので火を吹きながら席を立つ桂子。カケヒギごっこは\$25で成立。おもしろいことに握手をして別れる。売り子にとっては\$25でも大もうけなのだろう。ま、いーか。この聖獣バロンちゃんはわが家の魔よけとして鎮座す。(おかげさまでこの2年、大きな病気もけがもなくやってこれてます)

さて今日はビーチを南のほうへオサンポ。犬のクロがご同伴(かってに名前つけるなよ)。バリの犬はたい

ていピーナツ顔の皮膚病持ち、かつ脱肛しているものがほとんどという悲惨さ。しかもこいつら、昼間はグデ〜っとしているくせに夜になれば凶暴に吠えまくる（と、だれでも旅行記に書いてしまうくらい恐ろしい）。でもクロはバリ犬には珍しくカワイイ。

朝食後、サヌールを南へ。

陶器屋さんとサリプミとキカブックショップをめざして歩く。途中アンティークショップに2軒入るもイマイチ。アートショップでは、メイヨールの妻・ポロックの写真集があるではないか！昨日、メイヨール美術館では非売品なので売れない、と言われた数々のショットを含むすばらしい写真集である。100,000Rp(4,000円)の大枚はたいて買ってしまふ。昔のフィルムは感度が低い、ストロボもない、開放絞り周辺で撮ることが多くソフトムードでおくゆかし。ポロックさんは子供るときからプリマドンナ。そのときのリンとした表情はパーサンになっても変わらないのには驚く。真四角の写真が多いのはたぶんローライを使っているからであろう。今後の創作活動？のヒントがたくさんつまっていると思えば4,000円は安い、とムリヤリ納得。(一郎)

サリプミでは、友達にたのまれたコーヒークップ&私も何か陶器を、と、サリプミを捜し、あげくには陶器工場までメチャ捜して乗り込んだものの、いまひとついいのが見つからなかった。

疲れきってCAFE BATUJIMBARへ。メニューを開くなり一郎が「高い」。ホテルで税込4,500Rpのビールがここでは5,720Rpもする！といっても45円のちがいなんですけどね。私のたのんだミックスジュースでも4,800Rpと、高い！とんでもない店に入ってしまった…と、後悔の嵐。

それでもとにかくビール、ジュース、ナシゴレン、オープンサンドイッチをたのむ。でも出されてびっくり！！とにかくおいしいのだ！！(桂子)バリの焼き飯、ナシゴレンはたいいていデパート食堂風ケチャップライスでお茶を濁されることが多くマズイのであるが、ここではすばらしい。香草とフライにんにくが醸し出す絶妙なハーモニー。サンドイッチはパンが全粒でしっかりしてて、チーズ、アボガド、トマト、玉ねぎ、アルファルファが薄味ながらも抜群の調和。これは日本の高級レストランで出しても通用する味だと思った。(一郎)

あえて人の乗ってる乗合ベモにチャレンジしホテルに帰る。影絵人形芝居ワヤンクリットを(桂子が!)予約Telしてから、またまたビーチへ。ちょっと冷えてきたのでレストランからジンジャーティーとケーキを運んでもらい、ビーチで食べる。こんなのもステキ。ジンジャーティーはしょうが湯の味。(桂子)

さてワヤンクリットへくりだす。王宮風の店構え。入口のドアが開けられ入っていくと、2人組楽団のウェルカムガムラン。ああ、気恥ずかし。ワヤンクリット

は途中まではあまり動きがなく、延々と繰り返される人形の語り。もちろん言葉なんてわからない。なんとバリの人もわからないという古語だそう。そう、歌舞伎の世界ですな。つつつというた寝してしまう。

突然！戦いのシーンとなり、スクリーンに人形をバタバタと叩きつけて遠近の表現が加わり、大迫力。終わったあとは舞台裏を覗かせてもらったりした。眠かったけど、おもしろかった。(一郎)

■ 1995年5月2日

ベモでデンパサールへ。市場着。「10,000Rp」と言われる。支払いに手間どっていると外からゾンビおばさんが「イチマンルビ〜〜〜！！」と叫ぶ。このゾンビはまだ走行中の我々を、ニホンジン＝カモと確認するやベモに接近。自分の店への強制連行を画策したのであった。当然ムシシ、市場に入る。そんな我々にゾンビはまわりつく。ゾンビは片言の日本語をあやつる。「ソレ、キュウリ、ミカン、ナス、ヤシノミ。」そんなこと、わかるつうの！オレは一応、プロのやおやなのだ！市場はすげえにおい。いままで経験したことのない不潔な臭いだ。このイヤな臭いに増してウルセエのはゾンビだ。「ニカイ、ミルダケ、イカット、バティック、アナタ、ミルミル」あ〜〜〜〜〜〜ウルセエ！ゾンビの執拗な攻撃から逃れようと市場内をグルグルまわる。しかし、撒いても撒いても次々と新たなゾンビが現われ、さすがの我々もパニック状態に。これはもうアカン、と川向こうのマーケットに退散す。今までいろんな国の市場をぶらついてきたけど、途中退場なんてはじめて。今回の旅行で経験した唯一イヤな事でした。

でもさ、彼女らをゾンビにしたあげたのはきっと我々日本人なんだよな。市場のおばちゃんがなんの気なしに言ってみた10～100倍の価格を、バカな日本人がヨッシャ、ヨッシャと受け入れてしまうから、善良なバリ人をどンドンゾンビに変身させてしまう。もちろん自分で納得した価格ならばいいけど、無知や無関心からくるヨッシャ、ヨッシャはバリ人の貨幣感覚を狂わし、ゾンビを増やしてしまう。オレも気をつけよ。

川向こうマーケットは1Fが地元客用、2F以上が観光客用の店構え。桂子がハンカチ、と店番のアンチャンに告げると、あつというまにバティック屋に連行される。しかしアンチャンは、日本語を使ってみるのがうれしくてたまらない、というカンジなのでほほえましい。小心者の我々にしては珍しくも、ゆったりとショッピングを堪能する。結局、イカットのシャツ2枚、イカットのサロン2枚、オビ2枚を相方の駆け引きのなか、130,000Rp(5,200円)で購入す。ま、こんなも

んでしょ。我々をカモにしたアンチャンの名はブット君。彼はアサイチにカモトリをした功績をマダムから認められ、早退して我々にオツキアイすることを許可されたらしい。ブット君はニワカガイドになり、「ココ、タカイ」などと教えてくれた。

さてジャगतナタ寺院である。この寺はバリ・ヒンドゥーの最高神、サンヒャン・ウィディを祀るという、由緒正しきお寺。ふだんはClosedだが、今日はなんとOpenではないか。桂子が門柱付近にいた男に、入れる？とジェスチャー。あちゃ〜この男、どう見ても寺のスタッフじゃねえぜ。お寺で帯を借り、案内してもらおう事になってしまう。おたがい怪しげな英語を駆使してお寺めぐり。寺院内は狭いので、案内はすぐに終わってしまう。クダンのガイドは、お寺から帯を借りたお布施は、5,000Rpが相場だという。おそらくその内の4,000Rpはガイド氏が中間搾取するのだろう。

さて博物館。ここでもアヤシゲな日本語を操るオッサンが登場。「ガイドいらないよ！」とキッパリと拒否の姿勢を示す、不屈の日本人、渡辺と小堀。「ガイドデナイ。ワタシガクセイ。ニホンゴベンキョウシタイ。」ええ〜い！そんな老けた学生がいるか！この老学生？は勝手にガイドを始めたので、「お金は一切出しません！」と断れば、「ワタシガクセイ、オカネイラナイ」と言うので、ま、いーか。しかし！このヤカラはさっきの我々の気持ちの良い買い物（ブット君の店ね）を、「ソナモノ、ニセモノ。ホンモノハ☆☆☆ツイウミセニアルダケ。」とのたまう。ほっとけ！きくとコイツはミヤゲモノ屋のマワシモノなのだろう。この一言で完全にキレてしまい、100%無視しているとアッチへ行っちゃった。

桂子は暑さのためかグズりだし、すこし火を吹き始めている。ヤバソ〜。メシ屋にやっとたどりつく。地元サラリーマン御用達の定食屋ですな。牛のシッポのスープがうんめかった。定食屋の華僑のオヤジにティアラ・デワタショッピングセンターの場所を聞き、ダラダラ歩く。桂子のグズり、高水準へ。ほーほーのてーで店に逃げ込む。あ〜ひゃっこい。しかし！！この店のカセット屋は洋楽中心だし、本屋はショ〜モなく、なにもおもせぐね。桂子はグズり水準をホットゾーンにまで上昇させている。あ〜！渡辺あやうし！

とりあえずいっぶくしますか。ゲームセンターそばの食堂で。屋台風出店がメン、サテ、中華、デザートなどと並ぶ中、トリのあえソバ1,500Rpを食べる。意外！すげえおいしい。（一郎）

スーパーマーケットへ。ドゥリアンキャンディー、いも飴等、いろんなものを買うことでウサ晴らし。そしてだあ〜い好きなマンゴスチンと、今回初めてホンモノを食べたパッションフルーツを買う。まずマンゴスチンを選んでいとおばちゃんが寄ってきて、ひびが入っているのや割れているのは良くないからそう

じゃないのを選び、とアドバイス。次にパッションフルーツの所では別の女の人が、赤い方が熟れているので良いと教えてくれる。マンゴスチンは7個で1347Rp（54円）。パッションフルーツは4個で435Rp（17.5円）だった。は〜、タメイキ。現地ではしか味わえない、アジアの豊潤を惜しみなく味わう。うれしいな。（桂子）

■ 1995年5月3日

ウブドへ移動の日でR。ガゼボコテージでの最後の食事。テーブルに向かうと、いつもの席のイスをボーイが行く前に引いてくれる。何というゼイタク。（桂子）

ウブドへの送迎の途中にバトゥラン村に寄ってもらよう頼み、バロンダンスを観る。昨日までのレストランの余興とはちがいが、さすがプロ。バロンの動き、サル表情、身のこなし、ガムランもすばらしい（今を思えばこれはバンジャール・デンジャランの歌舞団。悪いわけない）。渡辺は200mmレンズで連写。動きの瞬一瞬を追っていくため、とてつもない集中力が要求され、汗だくになる。これだけ苦労してるんだから、1枚くらいはマトモに写ってたらいいな。（一郎）

ウブド着。プリンガジュイタ・ウォーターガーデンコテージ。これも日本でご指名して予約したホテル。2階建てのコテージで、ベットルームとバスルーム以外は壁がなく、外の空気や風、手入れの行き届いた庭の景色がそのまま入ってくるという感じ。一郎はやたら気に入ってる。よかったよかった。（桂子）

タクシーでネカ美術館へ。絵の照明にほとんどライトを使わず、採光をキチンと考えた建物の設計。すげえ〜自然に鑑賞できる。ムソルグスキの『展覧会の絵』のメロディとリズムでゆったりと。日本の展覧会ってさ、立ち止まらないで下さい、つてなカンジが多いもんね。

アンチャン登場。自分もトラディショナルスタイルの絵描きだと言う。アンチャンのガイドで館内を回る。イオン・サギダが好き、と言ったら嬉しがり、スモウレスラーのグランドチャンピオンはメイド・イン・USAだぜ、と言ったら驚き、スハルトを尊敬しているか、とイジワルに聞いたら、あらゆる力を持っている、とすげえ悲しむ。絵のことはよくわからんが、たたみ一畳分のキャンパスにチマチマと、マンガチックにバリの日常を描くウブドスタイルで、バリ人の誕生〜成長〜労働〜そして死に際する祭り描いたヤツがゴツウえがった。また、40年代のバリのねえちゃんを描いたオランダのホフカーや、互いにぎこちなく好意を伝えあう、にいちゃん&ねえちゃんのウイウイしさを描いたアブドゥル・アジスの作品は、売店の絵はがきを買って漁ってしまうほど。売店ではネカ美術館のカタログを買い、絵心のある知人へのオミヤゲに。

さて帰ろうか。例の絵描きだというアンチャンはやはりタクシーの営業。ウブドまで5,000Rpだと～！相場を知らないと思ってフッカけてきたな。おれ達は2,000Rpで来たぞ！3,000Rpまで下げてきたが、無視。3人がかりの執拗な攻撃を振りきって乗合ベモを待ち、1,000Rpでウブドへ帰る。こういうの疲れるし、カンベンしてほしいなあ。(一郎)

ベモを途中で降り、ムルニズワルンで遅めの昼食。『歩き方』のオススメ、コンテストで優勝したという料理フィッシュタウチョソース、ベジタブルカレー等。このレストランは溪谷のすぐ横にあり、溪谷側に座ると、濃い緑・さらさらと流れる川の音・さわやかな風がメニュー以上のごちそうを運んできてくれる。テーブル担当のオバチャンが自分のコテージはキレイでクリーンで安い(20\$)ので、次はぜひウチへ来い、と住所を書いてくれるが良く読めない。ま、それもご愛敬。

シャワーを浴びて、タクシーでケチャを見に行く。ケチャ、子どものトランスダンス、男性のトランスダンスの3つを見る。結構緊張して見ていたので疲れる。帰りは歩いて帰ることにし、カセット屋、シルバー屋(ピアスを8つも買ってしまった！それでも1,040円)に寄り、『歩き方』で夜の雰囲気がいいとオススメのアリーズワルンで食事とビール。でも味はイマイチ。それに高い。後から考えると、ウブドで今回唯一食事が良くなかったレストランであった。(桂子)

■ 1995年5月4日

このホテルは朝食付き(で、2人でナント55\$ = 4,500円。ウレシクテ涙でそう)で、フルーツサラダかフルーツジュース、ホットサンドイッチかトーストかパンケーキのそれぞれをチョイス。そしてティーかコーヒー。2泊するので、1日目はレストランで、2日目はコテージで、ということにして、レストランへ。



桂子がレストランでおもしろ地図が貼ってあるのを発見。ウブドの日本食レストラン『影武者』の人の手作りタウンマップである。しかもホテルの人はていねいにもコピーをあげましようと言ってくれた。ありがとね。今日はこれを使って遊ぶことにする。

ホテルを出る。門のところで青年に声をかけられ、今日は自転車をレンタルしてみる。2日2人分で15,000Rpでハナシがまとまる。でもオツリがないとかで、800Rp余計に払うハメに…ま、いいけどね。一郎はカメラ2台、交換レンズ、三脚のフル装備。こんな重武装でしかも灼熱のバリ。サイクリング可能か否かが危ぶまれる。

一郎はカセット屋、桂子は洋服屋をメインにショッピングめざして出発。(桂子)

この時期、バリのカセット屋ではどこでも、コンピューターサンプリングのガムラン？が鳴っていた。演奏はシャーバン・ヤーハさん。オレ、あまりピコピコの電子音楽って好きじゃないんだけど、どの店に入っても鳴っているもんだからシマイにはメロディまで覚えちゃってCDを買っちゃた。ガムランの金属音でさ、コンピューター化しても不自然でない。愛聴盤のひとつになりました。さて例の『影武者マップ』オススメの『モンキー・カフェ』でお昼。この2Fはバリの田園風景が広々とみわたせる立地。そよ風にカラカラと竹風鈴や鳥のモビールが舞い、10年間はお昼寝できそうなすばらしい空間。注文はミー・ゴレンとナシ・チャンプルー。ミーは学園祭屋台風でいまさんだったが、ナシ～は作り置きではなく、オーダー後に調理したらしく、ていねいでおいしい。(一郎)

このオーナーは日本人女性で、『よしこさん』という人なのだそう。店には彼女が日本から持ってきたという雛人形が飾ってあり、店番をしているバリニーズに「これは何と言う名前だ」と聞かれる。『OHINASAMA & ODAIRISAMA』と紙に書いて教えるが、この人形が持つ女の子の幸せを願う気持ちなどは、伝えようがなかった。彼女がどんな気持ちでこの雛人形を、嫁いだ異国の地に持ってきたか、同性の私にはちょっとわかるような気がする。(桂子)

『影武者マップ』にある景色のよい溪谷にむかってGO！！でも行けども行けどもよくわからない。30分近く走ってから人に尋ねたら、超行き過ぎなのがわかり、逆戻り。山越え、寄越え、来た道をまた戻る。照りつける灼熱の太陽光線、旅の疲れも最高水準。

『影武者』までもどる。ごくろーさん。『影武者』は蔵を改造した炬燵焼き風建物。例のマップにあった『極楽通信・UBUD』定期購読受付中、という記事に惹かれて入り込む。日本にいながらウブドのナマの情報を入手できる、なんてスゲェじゃん。中に入るとそこは一仕事終えて身内はお食事中、てなカンジ。しかも

ウブド在住の日本人だけのたまり場だもんね、という雰囲気も漂っている（ゴメンね。当時はそうだと決めつけていたのです）。気遅れもしたが、マスターに声をかけてみれば、ただの世話好きのおっさんだった（伊藤さんごめんね）。ライステラスが見たい、という穴場を教えてくれる。うれしくなって『～通信』バックナンバーのすべてと定期購読を申し込む。

さて、モンキー・フォレスト近くの渓谷へ出発。今度は道もわかっているのでスイスイね。途中で自転車から降りて農家の庭みたいなところをデタラメに下って行くと……目の前に広がる大パノラマ！！ライステラスとヤシの木、そして渓谷。これぞバリ、これぞウブドという景色に感激。右のほうに沐浴場があるので行ってみる。

ここからのながめがまたすばらしい。お写真を撮りまくる。さあ、帰ろうかな…とした、その時！！ええ！！！！なにこれえ～！！！！こおんなところにみつけた！すばらしレリーフ、みつけた！虎、蛇、蛙、寝ている子供、その子供をあやす人などなどの像が30mくらいに渡って岩肌に浮かび上がり、苔むしている。なんだかちょっと心がまる思いである。無名だからこそ原形のまま残っているのだろう。稼密にしておく。

今度はモンキー・フォレストを通り抜けて帰る。こうすればムチャクチャカンタンに帰れた。往きの苦労は一体、何だったのだ。

今夜はウブド王宮で『ガボールタンス』。けど、イマイチどころかイマサンのデキであった。（一郎）

今日はホテルの朝食の席で桂子が地図を発見、「Please show me this map.」から始まり、地図をもらって、すばらしい渓谷とレリーフ、ウブドに住む日本人とのつながり、情報などいろんなものが得られたすばらしい一日だった。今回の旅は、ぼお～とゆっくりする…だからあらかじめ細かい予定は組んでいかない、自転車を借りて行きたい所に自分の足で行く、写真をゆっくり撮る、など、したいことがほとんどできた感じがする。それはバリがホントにいい所で、そして私たちがだいぶ旅慣れてきたということかもしれない。（桂子）

■ 1995年5月5日

朝飯。わたしとしては大変珍しく、ご両親様にはがきを書く。これも今回のバリが心地よい旅であることの表れか。さて、今日はバリ旅行最後の日。飛行機は21:45の遅い便なので、ホテルはレイト・チェックアウトにしてもらい、自転車遊びに出かける。プリ・ルキサン美術館である。メイン・ストリートの路肩を下れば、



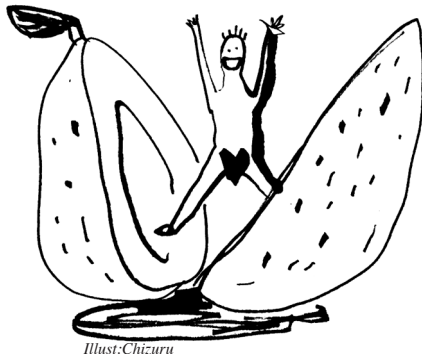
谷間を越えた所にそれはある。すげえフンイキのあるカンジ。しかし、展示内容はイマイチ。なんかトラディショナル過ぎてなあ。早々と退散して池に咲くロウタス（蓮の花）などを撮影する。じゃらん、じゃらん。

次はパサール。1Fは地元の人向け、2Fは観光客向け。おみやげハンカチを25枚ほど3店に分けて購入。店番にもそれぞれ個性があり、10倍ほどぶっかけてきたり、もうけそこねて不機嫌な顔してたり、ヤなカンジの人もいる。でもイカット屋のおばちゃんはよかった。あちらもこちら満足できる商取引。世界経済は無問題。渡辺は市場内部をお写真撮り。

お昼は『トロピカーナ』で。ナシチャンブルーとアヤムゴレン。桂子60点で渡辺は80点。ジンジャエールを頼んだら、しょうが湯が出てきた。ま、いーか。店のねえちゃんは昼メロに夢中の昼下がり…。

昼飯後、ダラダラ自転車じゃらんじゃらんは続く。いろおんな路地裏を覗きながら。しかし悲しいかな、ボロのレンタル自転車。サドルがSM用の木馬状態（どんなカタチか知らないけど）になっており、けつがいてえ。そうでなくてもひと様より繊細なけつだ。遂にGive up.だ。帰るか。あづ～い。34℃だぜ。かえる蛙。ホテルに逃げ込む。おふろに入ってビールを飲む。ウダツとする。最高ね。しばし惰眠をむさぼる。日本では何かに追いかけられているようなカンジしてなかなか惰眠できない渡辺であったが、当地においてはバルブ全開で眠り姫。ええのお。

来年もバリに行くもんね。ぜったい、ぜったい、いくもんね。バリに行ったことのある人でバ리를悪くいう人に会ったことがない、とかホンに書いてあった。最初は半信半疑でしたが、すべて事実でした。ただひとつ、ホンの記載で間違っている事、それは、バリの料理はおいしかったことだ。特にスーパーや街の食堂レベルのものに絶品モノがあって、その水準はタイと同じほど。ライターの諸君にはこのへんをキチンと書いてもらいたいモンですなあ。あ、搭乗時間とあいなりました。最後まで我々のくだらん駄文につきあってくれてありがとおね。（一郎）



Illust:Chicuru

(5) 授業、初体験！

ユキ

スだけが、どうしても授業の教室が見つけれなくつ、まだ見学していない。《アガム》とは、バリ舞踊の最も基本となる構えの型の名前で、よって「このアガムのクラスは、3つのグループの中でも一番始めに受けるべき最も基本のクラスだから、B女教授のクラスを捜して最初はその授業を受けるといわ」と、先週他の教授に言われたのだった。

…というわけで、今日はその残る1つの授業を見学するために、またしても学校に出掛けた。朝の8時10分前にバイクでコスを出、楽勝で2分後には学校に着き、いつものようにバイクをコントロールの横手に止めていると、運のいいことに、ちょうどそこを先週知り合ったばかりの、セミスター1の女の子が通りかかった。「あっ、ねえ、ねえ！」大声で彼女を呼び止め、B女教授のアガムのクラスの場所を知っているかと尋ねてみると、「“パメラ”でやってるわ。私もその授業を受けているの。」というので、彼女と一緒にについて行くことにした。「それにしても“パメラ”かあ。」私は意表をつかれて驚いてしまった。《パメラ》とみんなが呼ぶ、その建物では普通、絵画科の学生たちが授業を受けるので、まさかそんなところまでへは、私も先週捜しには来なかった。「これじゃあ、見つからないわけだ…」始めてこの建物の中に入ってみると、あたり壁一面に絵が飾られている。どうやら生徒の作品らしいけれど、どれもこれもカラフルでモダンな作品ばかりで、クラシックなスタイルのものは見つからない。「ニホンジン？ キレイネー」そこから中にいた絵画科の学生たちが一斉にこちらを注目して、自分たちの知っている限りの日本語を使って話しかけてくる。まだ、それほど学校に来ていないけれど、これまでの経験上、絵画科の学生が一番ノリが軽い、と私は思う。日本語を使って話してきたりするのは、必ずと言っていいほど絵画科の学生だ。それに絵画科の学生たちには、見た目あきらかに他の科の学生とは違う特徴がある。みんながみんなというわけではないが、長髪で少し汚いアーティスト風(?)の格好をした学生が多いのだ。

「私たちの授業は2階よ」と彼女が言い、階段を上って行くので、私もあとからついて行った。「おはよう！！」他の学生たちはもうすでにカインを巻

やっとのことで実技の授業を見学することができたのが、つい先週のことである。セミスター1のダサール(基礎)の授業、セミスター3のオレック・タンプリリンガン(蜜蜂の求愛を演じた踊り)とトルナ・ジャヤ(勝利の若者の踊り)の授業、セミスター5の三種類のレゴン(宮廷舞踊)の授業、セミスター7のアルジョ(歌舞劇)…と、バリ舞踊の授業はどれも片っ端から見ていった。どの授業も、始まってからすでに3週目ぐらいにはなるらしくて、あと2、3回ほど授業をこなすと、もうミドル・テスト(中間テスト)があってグループ移動(Aグループの人はBグループに移って別の踊りの授業を受ける)というから、なんとまあ、慌ただしいカリキュラムではないか。なにしろ、1曲の踊り、これが大体最低でも12、3分~20分ぐらいあるのだが、それをたった5回程度の授業回数で終えさせてしまうというのだ。S・T・S・Iに通う地元の学生たちは、基本はもちろんのこと、ある程度のレベルを達した学生ばかりだから問題ないとしても、これじゃあ、私みたいな外国人留学生には、かなり厳しいカリキュラムではないか。なるほど、「学校の授業には、あんまり期待しない方がいいよ」と言う先輩留学生の言葉は、こうゆうことを言っていたのだ…。

それでも、Iが以前すすめてくれたセミスター1のダサールの授業『テクニック・タリ1』なんかは、その名の通り基礎そのものなので、私でもついていくことはできそうだ。この授業もやはり他の授業と同じように3つのグループに分けられていて、先週はそのうちの2つのグループを見学したけど、あと1つのグループ、B女教授が担当するアガムのクラ

いて、授業の準備を始めているところだった。教授はまだ来ていないらしい。さっきの彼女は、みんなの輪の中に入って行って、バリ語でワイワイ話しているの、私はひとり壁ぎわに座って、みんなの様子を眺めることにした。このグループの生徒は、全部で10人ちょっとぐらいだろうか。その中に男子はたった一人しかいない。それから…あっ、外国人が私以外に欧米の女性があと3人、彼女たちも授業に参加するのだろうか…。そこへ教授らしき、若い男性が現われ、みんながその人物のまわりに集まりだした。

なにに、この教授が話すには、本来この授業を担当するはずのB女教授が海外へ行っているの、その間代わりに自分がこのクラスを担当するということらしい。さらに内容も、女踊りのアガムから男踊りの基本へと変更されるようだ。みんなはカインを男踊り用に巻き替え、列に並び始めた。私は授業の邪魔にならないように、場所を移動しようと立ち上がった、と、その時「アナタモ、イッショに」突然、日本語でその男性教授が私に話し掛けてきた。「えっ…、私、カイン持ってきていないんですけど…」びっくりして私がインドネシア語で返事をすると、「ダイジョウブ」と、ニコニコ笑いながらその教授はまたも日本語で言うてくる。周りにいた学生たちも、それに続いて「そうよ、一緒にやりましょう」と、口々に誘ってくれるので、そんなつもりはなかったんだけど…。と思いながらも、参加しないわけにもいかず、私は列の一番うしろに他の外国人と並んで、私服のまま授業についていくことにした。

まずは、お手本。教授がいくつかの基本的な振りをやって見せ、そのあとから生徒が続く。「サトゥ、ドゥァ、ティガ…」から「ドゥラパン！」まで、規則正しく先頭の学生が繰り返し掛け声を出し、みんながそれを合図に教授に教えられた通りの動きをすると、「手はもっとこうして、首はこのように…」時々教授の注意が入る。「うわあー、いかにも学校の授業って感じだ〜」私はぐると周りの学生たちを見渡した。横三列、縦四列ぐらいに並んでいる、その最前列で踊っている子たちは、コカール（芸術高等学校）を卒業した上手な子たちばかりだ。特に、そのうち一人は、私の見覚えのある子。以前からオダランなどで彼女が踊る姿を見かけていて、ずっと上手な子だな〜と思っていたけど、このクラスでもやっぱり彼女がひととき目立ってうまい。よし、決めた！ 教授はずっとは一緒に踊ってくれないし、彼女をお手本変わりにしよう！ 私は授業の間中、ずっと彼女に注目して、彼女の踊りを見なが

ら自分も踊った。

途中、教授の話や休憩時間などを入れて、約1時間半。授業の終了は、ベルなどの合図で知らされることもなく、それぞれの授業がおのおの勝手に終わっていく。みんなはカインを取って、ジーンズなどにはき替える。私も汗を拭ってから、じゃあ帰ろうかなと思っていると、さっき私がお手本変わりにしていた彼女とふと目が合った。「ユキ、でしょ？ 私はD」どうやら彼女は私のことを友人のA君から話で聞いていたらしい。とても屈託のない笑顔で彼女は自ら自己紹介をしてくれた。そして、一緒にお茶でも飲まない？と誘ってくれたので、学校のキャンパス内にあるワルンでエス・テ（冷たいお茶）を飲んで、しばらく雑談をしてから、彼女は次の授業に、私は帰路についた。

「ずっと以前から顔だけは知っていた彼女と、今こうやって知り合うことができたのは、S・T・S・Iの留学生となって授業に参加したからなのだ…」授業の中身は、それほど役立つものではないとしても、こうゆう出会いがあるなら、授業に参加することも決して無駄なことではないかもしれない。

とにかく、その日は、とても充実した日を過ごすことができた私なのであった。

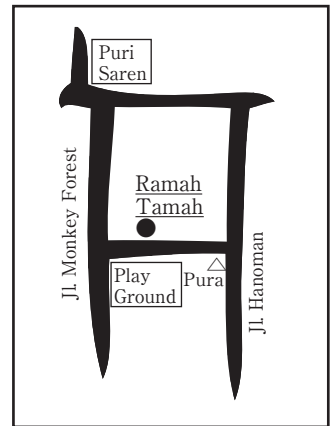


Toko ◇ BEST 店

Ramah Tamah

スパゲッティで有名な“アパカバール”の向かいあたりにこの店が出来た時は、ホント〜に驚きました。小さな間口、店内冷房のため表のドアはいつも閉められていて、最初はなんのお店かわからなかったのですが、ドアを開けてみて、ビックリ仰天!! デイリーバイクのフランスパンやクロワッサン、ブラウニーなどのちょっとしたケーキ類が、まず入り口近くで“おいでおいで”して来ます。そのまま視線を移せば、んん? 何やら見覚えのある商品が棚にずらり…。うどん、素麺、そば、七味唐辛子にチューブ入りわさび、海苔、お煎餅やS & B ゴールデンカレー、乾燥わかめといった、ここはまるでちょっとした日本食材店、ではありませんか。ふと横の冷蔵庫を見れば…バターやチーズと一緒に売られているのは味噌、納豆、豆腐…といった、これも懐かしい味の数々。聞くところによると、ここのお店の持ち主は欧米の方ということですが、日本食が大好きで、ちょくちょく影武者にも食事に見えるそう。趣味と実益を兼ね備えたお店…ということなのです。もっともここは、かつて日本食材店ではなく、どちらかというところ“健康食品を提唱するお店”。ハーブや豆、香辛料のグラム売りもあり、種類は豊富に揃っています。ポピーシーズなど使って、美味しいケーキでも焼いてみたくになります。ウブド某居酒屋店主もこのパンがお気に入り、で、“朝ごはんに食べようと思って買うんだけど、いつもその日のうちに我慢できなくなって食べてしまう”…そうです。本当、ウブドも段々便利になってきたなあ、と実感させられるお店の登場でした。

Jl. Dewi Sita, Ubud, Bali Tel: 975754 ■ 営業時間: AM9:00 ~ PM9:00

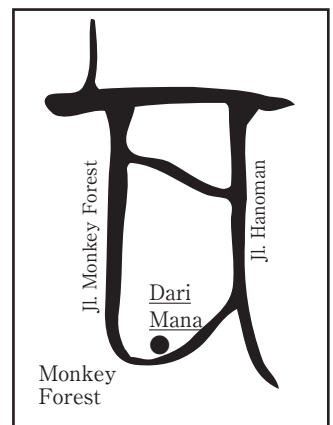


Warung ◇ 味な店

Restaurant Francais DARI-MANA

バダンテガルからモンキーフォレストに向かう道。ちょっとお洒落なレストランが誕生しました。その名は“ダリ マナ”。一階のテーブル席、二階のお座敷、どちらに席をとっても、のどかな水田風景を見渡せます。一階奥のオープンキッチンでは、清潔なキッチンと真っ白いコスチュームできびきびと料理をつくるバリ人(!!)の姿を眺められます。オーナーはフランス人の女性。折角なので我々も奮発してフランスワイン (5万ルピア) を頼んだのですが、ワインのサーブの仕方は本式ですよ。コルクを抜いたら、“テイastingはどなたがなさいますか?”と聞かれ、そのあとおもむろにグラスにワインが注がれる…まさかウブドのレストランでこの“儀式”を経験するとは思っていませんでした。もっともオーナーの女性がつきっきりで、ワインをサーブするバリ人にいろいろと指示をしていましたけれど…。メニューはインドネシアンからヨーロッパまで実に豊富。黒板に書いてある、今日のお薦めメニューも要チェックです。我々はサラダと、今日のお薦めの“蛙の足のプロヴァンス風ソース”“ピザ マルガリータ”を頼んだのですが、サラダのドレッシングはさっぱり上品で野菜とのバランスも丁度良し、プロヴァンス風ソースは素材である新鮮な野菜の美味しさをしっかりと味わえる、そしてピザはカリカリうすうすのクリスピーピザでチーズがたっぷり、の満足品々でした。食器の並べ方、ワインにつき方等、オープンして間もないのでなんとなくまだ従業員の態度がぎくしゃくしているような気もします。それは今後の課題でしょう。もっともサーブにこれだけ気を使っているあたりが、他のレストランとはちょっと違うかも。水田を見ながらワインを開けてお食事…、そんな贅沢な気分を十分に満足させてくれるレストランでした。

Jl. Monkey Forest, Ubud, Bali Tel: なし



Tokoz Sayang + 本店紹介

私の常宿

Pondok Manis

Kokokan Hotel

有田一彦&泉

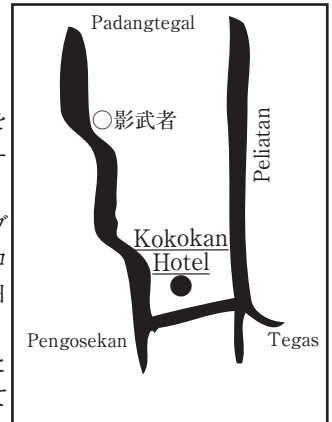
ウブドの南、アルマ美術館の隣にあるのがこのホテル。ライステラスを見晴らす山の斜面に佇む、ウブド風バンガロータイプ。ホテル設備やサービス内容には文句ありません。

以前はプリンダーという名前でしたが、入り口付近のココカンクラブ（タイ料理レストラン）がその美味しさで有名になったため、ホテル名もココカンにしたとか。最近某旅行社がツアーホテルに組み込んだため、日本人客も増えているみたい。

オーナーがアグンライギャラリーの、あのアグン・ライ氏で、ホテルとアルマが同一敷地内にあるのも特筆もの。宿泊者はフリーパスで散歩がてら絵画鑑賞が可能です。ちなみに、アルマから西側に抜けると「影武者」までわずか数分というロケーション。ゆっくり休暇を過ごしたい人にお薦め。

スタンダード 78～88ドル（集合コテージ形式）
スーパーリア 155ドル（バスだったりシャワーだったり種々）
デラックス 180ドル（バスがでかくて給水に長時間）
（どれもさらに21%の税金要。値段交渉はあなたの腕次第）

Tel : (0361)975742 Fax : (0361)975332
Ubud, Bali 80571, Indonesia



旅人一声 Pesan & Kesan

湊 佳子

私は卒業論文に「バリ舞踊」を選んだ。そして、「自分の身体で体験し、自分の目でちゃんと見よう」と、そんな簡単な理由でバリを訪れることにした。

初めてのひとり旅が始まった…。

バリに到着したのは夜、街は暗く、自分が今どんな所にいるのかまったくわからない。心細くて、不安で、大げさなように、これからどうなるんだろうと淋しくなる。

一夜が明け、目覚めた時、心が何だか落ち着いてきた。バリの空気、そして、太陽の光が私を優しくつつんでくれるようだ。「Selamat Pagi」と、みんなが笑顔で挨拶してくれる。

レゴンを習うことにした。

何度も何度も同じことを繰り返すのが、身体が思うように動かない。先生はできないと真剣な目で私を見つめる。「何でこんな簡単なことできないの」と言われているようで怖かった。つらい、苦しい、逃げ出したいと思った。

バリに来て7日目、帰る日も近い。

ここで、ひとりぼっちだと感じたことは一度もない。バリの人、長期滞在している日本人、みんな親切で優しく迎えてくれて、私もとても優しい気持ちになれる。そう言えば、ここに来て「ムカツク」って思ったり、怒ったり、イライラした事がない、そんな気持ちは忘れてしまった…。

レゴンを習うこともいつのまにかとても楽しくなっている。リズムに合わせて身体が動くようになってきた。無心になれる。もっと習いたいのに、やっと少し解ってきたのに…。私の旅は終わってしまう。何だかとても切ない。あっという間に過ぎたようで、とても長くここにいた気もする。

その他のニュース

■ますます便利になる“銀行システム IN UBUD”！

最近 UBUD に、ゾクゾクとインドネシアの大手銀行支店が進出してきました。UBUD の出店第一号は BANK CENTRAL ASIA (B・C・A) でした。B・C・A は去年まで、ノマド・レストランの隣の貸し店舗のひとつでこじんまり営業していましたが、今では場所も移動して立派なピカピカの建物に変身。外国人でも口座が開け、手数料を払えばキャッシュ・カードも作ってくれるようになりました。B・C・A の口座に残高がある人だけが使える 24 時間引き出せる A・T・M。ゴールド・カードとシルバー・カードがあり、たとえば、ゴールド・カードの場合、一回に引き出せる金額が 100 万ルピアで、一日二回計 200 万ルピアまで、そして、シルバー・カードは一回に 50 万ルピアで、一日二回計 100 万ルピアまで引き出せます。そして、なんと、この B・C・A に「貸し金庫」がお目見得。金庫には大きさの違う BOX が三種類用意され、大きさによって借り賃が違います。一番小さい BOX で保証金(解約時に返却されます)が 15 万ルピア、契約は年間で 5 万ルピア。鍵はカード式じゃなくいわゆる普通の鍵。ご利用になりたい方、詳しく知りたい方は B・C・A までね。そして、もうひとつ、BANK INTERNATIONAL INDONESIA (B・I・I) になると、クレジット・カード(VISA, MASTER) でキャッシングできる 24 時間の A・T・M が登場したのです!! ファースト・キャッシュは一回で 20 万ルピアで、一日五回まで計 100 万ルピアがキャッシング可。他にも、外国人でも口座が開けて、かつ、日本の都市銀行からオンライン(3~5 日ほど)で送金できる大手銀行がいくつもあるので、ここでご紹介しておきましょう。ちなみに、この他にも小さな銀行がたくさんありますが、あまり規模の小さい銀行だと倒産して預金がフイになる恐れがあるので気をつけましょう。

【1】 BANK NEGARA INDONESIA (B・N・I)

【2】 BANK DANAMON

【3】 BANK DUTA

いやあ、便利になりましたねえ。急に便利になり過ぎちゃうと、ついていけなくて戸惑っちゃう「極通」スタッフであります。



■タガスに新しいスーパー・マーケット登場!!

場所は、プリアタンから南下して、Br.Kalah の三叉路を道なりに左に折れてすぐ右側。小さな看板に MASSA'S と書かれているのが、新しく登場したスーパー・マーケットです。雑貨や食品、お菓子などは、Andong にある < DELTA DEWATA > より少~し安いです、が、品数が少なくてイマイチ。なのはどうしてここで紹介するかというと、安心プライスの定価で、流行のシルクのカマン(サロン)やブル・アヤムのクバヤ地が買ってしまうからなのです。シルクのカマンは安いものだと 5 万ルピアから。男性用の正装も揃っています。他には、女性用の正装の時にピッタリのお洒落なサンダルが豊富に揃っています。UBUD に来たらずい寄ってみて!!



■番外編：バンリのベンジョールは？

Vol.22 で、ガルンガンと満月が重なるとガルンガン・ナディといい、ベンジョールの先っぽにクリンチガンを付ける、と報告しましたね。ちょっと遅れましたが、この写真はバンリのベンジョールです。ベンジョールの中ほどから先が三本に分かれています。…で、ギアニャール地方のベンジョールには、クリンチガンと、鳥を型どった木彫りが付けられ…とも報告したのです



うぶな人々 その23 ほりり

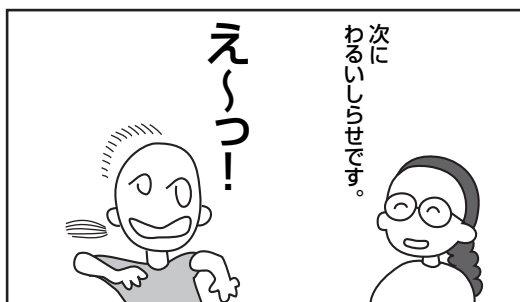
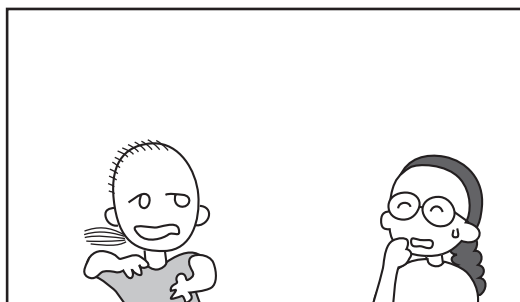
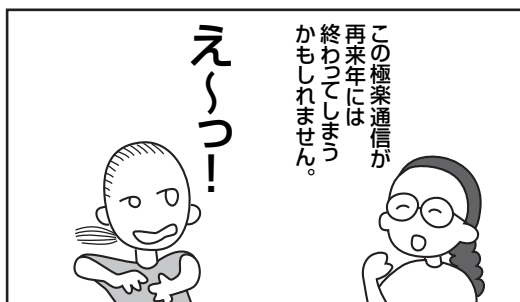
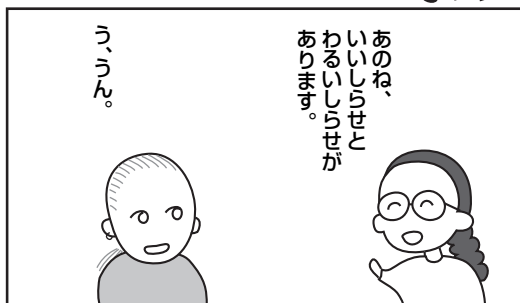
が、どうも鳥は付けたり付けなかったりで、各家や村々で少しずつ違うようです。地方によって少しずつ違う慣習のことを、インドネシア語で Adat、バリ語で Sima と言います。バリ人たちは、どこがどのように他の地域と違うか、「その意味は?」なんて尋ねてみても「う〜ん?」と、ハッキリ答えられる人はあまりいないようです。ちなみに、エナちゃんの家のおばあちゃんに「ガランガンナディの時のペンジョールには、どうしてクリンチガンをつけるの?」と尋ねてみたら、少し考えてから「そういうものなんじゃ、昔から」と言われてしまいました。そういうものなんですね。

■おじさんは怒ってるゾ!!

今、バリ、特に UBUD 近辺は、私が滞在し始めた 1990 年に比べて芸能が盛んになってきている。昔の踊りが復活されたり、新しい踊りが創作されたり、オダランでの芸能の演目も年々増えている。あちこちの村で、婦人や子供たちのガムラン・グループが誕生し活発な活動が見られる。王宮のお抱えガムランやバンジャールの儀礼のために演奏されるガムラン以外に、財団法人 Yayasan や個人所有のガムラン・グループ Sanggar も、ここ数年増え続けている。これらは、バリの芸能の保存と育成を目的に設立されている。この中に外国人の篤志家の援助によるガムラン・グループがいくつかあり、そして、その中にちょっと気になるグループが存在するので、意見を言わせてもらう。

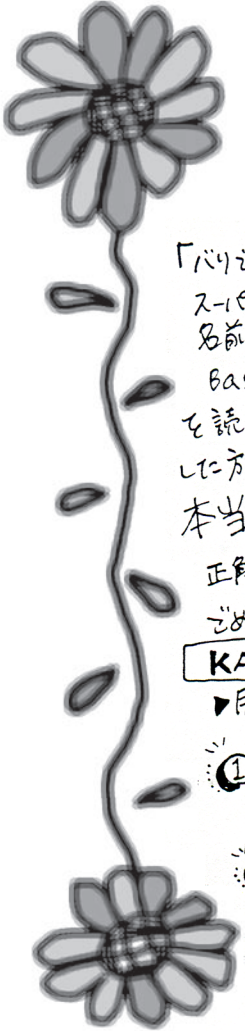
援助することは、たいへん良いことだとは思いますが、どうも見てみると、お金も出すが口も出す、おまけに顔も出すし姿も出し、まったく私物化してしまっている奴がいる。

バリの芸能はバリ人のもの。バリ人に任せておけばよいものを、あるグループでは、バリ人の踊り手がいるのにもかかわらず、篤志家自身が主役として出演してしまう。おまけに観光客から入場料を取ってである。外国人が踊るバリ舞踊に入場料を払われる観光客もたまったもんじゃない。あるグループでは、「私がスポンサーでござる」と、出しゃばり王様のように振る舞う篤志家がいる。「目立たないように応援したらどうだ!」と言いたくなる。また、ある篤志家は、村の組織や人間関係を崩してしまったり、グループに篤志家の名前を付けたり、バリの芸能のためと言いながら、しっかりビジネスしている篤志家。これらは、篤志家のエゴのためにガムラン・グループを道具にしているとしか思えない。ゆるせないぞ! (いかりや長髪)



【年間購読申込み方法】

エメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会:伊藤」、住所は巻末の BALI 本部です。料金は、4,000 円。おろかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座: 00190-6-573859 「影の出版会」です。



●おしらせ●

とろとろ 雨期のはじまった UBUDより、あわびのコーナーです。
前回 Vol.22 の「Enak Enak Ubud」で、サントンを使ったチキンカレーの
つくり方をご紹介したイチちゃんですが、とんでもない間違いをしておい
ましたので あわび & 訂正をしたいと思います。
「バリでは、独特のスパイスのブレンドがあって、それは Basa Bali といいます。
スーパーなどに、この Basa Bali インスタントスパイスがあって、Bumbu Bali とい
う名前で売っています」などと書いたイチちゃんですが、それは、実は
Basa Bali とはぜんぜん違う味のモノだったのではありません。Vol.22
を読んで さっそく Bumbu Bali とサントンを、チキンカレーをつつくと CoBa (試す)
した方、ももも、申し訳ありません!! 正しい味のものができ上がったはず。
本当は、Bumbu Bali とはなく、bamboe epa、KARE のもと^とが
正解だったんです。イチちゃんの勘違いというか、思い違い、ホントに
ごめんはさいいー。。。

STは、Bumbu Bali は、甘辛い風味、煮込みのモノではない?

KARE のもとをつかた正しいチキンカレーのつくり方

- ▼用意するもの・・・骨つきぶた刺しチキン 1/2 kg、お好みでじゃがいも、にんじん、または白身魚、セトヒト。
 (太く)
 ・煮汁用のサント(ココナツオイル) 2cup
 ・KARE のもと 13. <3
 MOPP 商標には「カニ」を「カニ」と書いてあるケド...
- ① 2cupの水と1cupのサント、
えい KARE のもとをよく混ぜ、
火にかかせ、ぶた刺し材料を入れる。
- ② 中火でグツグツ煮込む。水か減るが少くなく減って、材料がよく煮えたら
塩か減をみる。足りないようだったら 塩を足す。
- ③ 仕上げに、残りのサント 1cup を入れる。煮たてから コッ
ほんの 10秒ほど、グツグツして 火をとめる。
(長くまた煮るとサントから油分が分離しすぎてしまう)
- ④ コカン、クラブの カレー(ツナ入り)は、この上に
ティル(香草)を少しペラペラさせてました。 Enak Sekaliー!

Pengumuman

アムゴンはん

新企画の川柳コーナーは人気なして
投稿ゼロの為(笑)勝手にポツにな
りました。すみません!

〇, 〇, 〇, 〇, 〇



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / 堀 祐一 / 中田 恵

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：小塚昌子

極楽通信「UBUD」Vol. 23

1997年11月30日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1997 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内, tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101